

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13395

研究課題名（和文）植民主義からコモンウェルスへ：ポスト・ブレグジット時代の政治思想史構築へ向けて

研究課題名（英文）From Settler Colonialism to Commonwealth: A History of Political Thought in the Post-Brexit Period.

研究代表者

馬路 智仁（BAJI, Tomohito）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：80779257

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：研究の趣旨に即し、日本語・英語双方において着実に論文の公刊と国際学会・カンファレンスでの研究報告を行うことができた。これら趣旨・成果は次ページ以降で詳述する。この過程で、入植者・植民地主義をめぐるブリテン本国、南太平洋、日本を結ぶトランスナショナルな知的交流・実践的反響という視座を得たが、これは今後の研究発展につながる特に重要な成果である。2023年9月に発表した論文「グローバルな国際政治思想のなかの植民政策学 ―『間・帝国史的な思想循環』という試み」（『国際関係論研究』38号、pp. 1-23）にはこの視座が反映されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本では入植者・植民地主義(settler colonialism)をめぐる政治思想史分野の研究蓄積はいまだ乏しい。本研究最大の意義は、近代ブリテンを軸に据えながらこの欠損に取り組み、移住や植民によって大洋・大陸横断的に広がるグローバルな空間がいかに政治的に意味づけられ、構想されたか、その想像力の重要な側面を明らかにした点にある。

研究成果の概要（英文）：In alignment with the research objectives, I have consistently published articles in both Japanese and English, and have presented my findings at international conferences and congresses. These objectives and outcomes are detailed in the following pages. Throughout this process, I have developed an important perspective on transnational intellectual flow and exchange between Britain, the South Pacific and Japan, particularly concerning the topic of settler colonialism. This achievement is significant for the future advancement of my research. One of my achievements, i.e. my article "Colonial Policy Studies in Global International Thought: A Method for Inter-imperial Ideological Circulation" (Studies on International Relations, No. 38 (2023), pp. 1-23), reflects this obtained perspective.

研究分野：政治思想史

キーワード：グレート・ブリテン 入植者・植民地主義 ブリティッシュ・コモンウェルス 人種 南太平洋

1. 研究開始当初の背景

当該背景として、2点あげられる。

(1) 今日、イギリスの政治・言論界において「コモンウェルスへの回帰」と形容すべき構想が、ポスト・ブレグジット時代を展望する論争の一角を占めている。すなわち、アングロスフィアやCANZUK(カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、連合王国の英語名頭文字)、帝国 2.0 といった、英語圏を成し、またかつてのイギリスの入植者植民地でもある国家の間の政治的統合や連帯を促進しようとする構想である。

このような、EU からの離脱後再びかつての帝国領域と結合することを求める回帰構想は、過去へのノスタルジアに支配された実現可能性の乏しい幻想と批判し得る。しかし政治思想史学の観点から興味深く、かつきわめて重要であるのは、旧本国であるイギリスの知識人や政治エリートが発するこうしたノスタルジアの背後には、これまで注目されることの少なかった、入植者・植民地主義論やグレーター・ブリテン構想といった 19 世紀以来の重厚な知的堆積物が存在するという点である。この見過ごされてきた知的体積を描き出す必要がある。

(2) 関連して、この試みは政治思想史学のなかでこれまで照射されることの少なかった、入植者・植民地主義論を前景化することにつながる。入植者・植民地主義とは、本国から「無主地」と認識・表象される領域への移民と定住を伴う植民支配の形態を指す。かかる移民・定住の目的は、入植先に移住者自らの共同体や市民社会、自治的な統治機構を設立することにある。その過程において、原住民に対する迫害や強制移住、人種的隔離、文化的ジェノサイドといった暴力を伴うゆえに、それは「支配」的である。

従来の政治思想史学では、植民地主義という言葉が多義的それゆえに曖昧に用いられる傾向が強く、このような特定の、「移住パラダイム」に基づく植民地主義論への着目がきわめて乏しかった。しかし、「コモンウェルスへの回帰」構想の歴史的起源に取り組むことで、近代イギリス政治思想の観点からこの欠損の重要部分を埋めることができる。合わせてそうした入植者・植民地主義に基づくグレーター・ブリテン構想に照射することで、19 世紀から 20 世紀初頭の同国における知識人が、ブリテン島という孤立的な空間ではなく、移住を通じて大洋・大陸を横断して広がるグローバルな空間をいかに政治的に意味づけ、構成しようとしたか、その想像力を明らかにすることができる。

2. 研究の目的

本研究の最大の目的は、ポスト・ブレグジット時代を睨んだイギリスの世界政策をめぐる論争(「コモンウェルスへの回帰」構想)を、政治思想史学の観点から歴史的文脈の中に位置づけ、それを理解し、相対化するパースペクティブを提供することである。

同時に本研究は、学術的な貢献として、次の2点を目的とする。

(1) 近年台頭しているブリティッシュ・ワールド研究、そのなかでも特に「グローバル・ブリティッシュネス」論(イギリス本国民と移住植民地の人々の間の大洋を跨ぐ統一的なアイデンティティや精神的絆を主題化するプロジェクト)に対し、政治思想・言説史の叙述を通して貢献すること。

(2) 本研究は移住民と原住民の摩擦・対立を分析射程に収めることから、野心的ではあるが、今日の先住民問題を歴史的・思想的に再考察するための独自の足場を提供すること。これを通して、イギリス政治思想史研究を超えた、より普遍的な広がり(たとえば日本におけるアイヌ問題への示唆など)を確保すること。

3. 研究の方法

研究方法は、思想家・知識人のテキストを綿密に分析・解釈すること、およびそれらテキスト間の相互関連(参照、言及、依拠など)を押さえるインターテクスチュアルな分析を行うことである。また、関連の未公開資料を渉猟するためのアーカイヴ調査も行き、より根拠のある実証的解釈を目指した。

こうした方法に基づき、具体的に対象とした思想家・知識人は以下である。入植者・植民地主義論については特に、E.G. ウェイクフィールド(1796-1862)、J.S. ミル(1806-73)、J.R. シーリー(1834-95)、グレーター・ブリテンおよびブリティッシュ・コモンウェルス構想の文脈では、J.A. ホブスン(1858-1940)、L.T. ホブハウス(1864-1929)、アルフレッド・ジマーン(1879-1957)などである。

4. 研究成果

本研究の成果は、次の4点に大別される。

(1) 19世紀前半から中葉にかけての入植者・植民地主義論(E.G. ウェイクフィールド、J.S. ミル、ハーマン・メリヴェール、J.R. シーリーら) 19世紀後半のグレーター・ブリテン(シーリー、E.A. フリーマン、J.A. フルード、W.T. ステッドなど) 20世紀初めのブリティッシュ・コモンウェルス構想(J.A. ホブスン、L.T. ホブハウス、アルフレッド・ジマーンら) それぞれの知的潮流を時代順に分析するとともに、系譜的にこれらをいかに結びつけることができるのか、を一定程度明らかにした。その際鍵となったのは、本国ブリテンと本国からの移住・植民者(海外ディアスポラ)の間に、共通の人種や文化、言語、民主的価値観に基づいていかなる精神的・道徳的紐帯が観念されていたか、という点である。

具体的には、以下のような成果を得た(ここで述べるのが全てではない)。Tomohito Baji, "The British Commonwealth as Liberal International Avatar: With the Spines of Burke," *History of European Ideas*, Vol. 46, No. 5 (2020)は、縦軸(時間)にエドモンド・バークの作品の解釈のなされ方の変遷を、横軸(同時代の知識人)に19世紀末から20世紀前半における2人の国際主義者レジナルド・クブランド、アルフレッド・ジマーンをとって、グレーター・ブリテン構想とブリティッシュ・コモンウェルス構想を結びつける一つの重要な線を明らかにしたものである。またこの査読論文は、近代におけるリベラリズムと帝国、文明の思想的関係に関心を寄せるヨーロッパ各国の研究者とともに組んだ特集号"Britain, 'European civilisation', and the Idea of Liberty"の一部でもある。すなわちこの論文の執筆過程において、これら研究者と国際的ネットワークを築けたこと(あるいは深められたこと)も大きな成果であった。

Tomohito Baji, *The International Thought of Alfred Zimmern: Classicism, Zionism and the Shadow of Commonwealth* (Palgrave Macmillan, 2021)は、とりわけアルフレッド・ジマーンの帝国・コモンウェルス・国際秩序論に焦点を合わせたモノグラフである。本書によって、グレーター・ブリテンやブリティッシュ・コモンウェルスという共同体の紐帯として、いかなる人種・民族観、およびいかなる文化的結びつきが観念されていたか、個別の思想家に絞って具体的に明らかにすることができた。また、国際関係論(IR)の創始者の一人でもあるジマーンについての単著は世界的に類例が乏しく、この点でも本書は重要な成果であった。

Tomohito Baji, "An Apex of the Racialization of the World," *International Politics / International Politics Reviews*, Vol. 60, No. 3 (2023)は、Duncan Bell, *Dreamworlds of Race* (Princeton University Press, 2020)をレビューしながら、19世紀末のブリテンにおいて人種という越境的な結びつきが、グレーター・ブリテンおよびアングロ・アメリカン共同体の構想にいかなる意味を有していたかを検討した論文である。ここでは、国民でも民族でもない、人種という纏まりの独特な帝国・国際的意味を一定程度明らかにしている。

(2)(1)の成果の派生として、入植者・植民地主義が展開された南太平洋地域(オーストラリアやニュージーランド)からの視角を検討し、特に著名な歴史家J.G.A. ポーコックが「新しいブリテン史」の枠組みの下で、本国ブリテンとの関係をいかに捉え直そうと試みたかを吟味することができた。合わせて、1960年代以降の太平洋・脱植民地期に、ブリテン帝国主義の深い影響下にあった中・南部太平洋の島嶼地域において、帝國的なブリティッシュネスがいかなる批判に晒されたかを研究することができた。

この面では具体的には、以下のような成果を得た。Tomohito Baji, "Oceanic Internationalism: Epele Hau'ofa and the Archipelagic Vision of the Pacific," in Matthijs Lok et al eds., *Beyond Left and Right? Antiliberal Internationalism in the Twentieth Century* (Routledge: 2024 forthcoming)は、脱植民地期の南太平洋において、部地点を含む既存の帝國的遺産からいかに脱却し、いかなる新たな太平洋共同体を築こうとしたか、についてトンガ出身の先住民知識人エペリ・ハウオファに焦点を合わせて描き出したものである。またこれは、馬路智仁/古田拓也「エペリ・ハウオファと『島嶼海の主権』 太平洋の自然を守護し、歴史を叙述する」『政治思想研究』23号(2023年)wp反リベラル国際主義という視角から発展させたものでもある。

(3)(1)の成果の派生二つ目として、19世紀末から20世紀前半のブリテンにおいてブリティッシュ・コモンウェルスを構想した論者の知が、同時代の日本にどのように波及したかも付随的に検討し、その結果、近代日本の帝国主義的南洋論をめぐって、英語圏の帝国論が重要な役割を果たしているという知見を得た。この成果は、二つの単著論文 Tomohito Baji, "Colonial Policy Studies in Japan: Racial visions of Nan'yo, or the Early Creation of a Global South," *International Affairs*, Vol. 98, No. 1 (2022)や、馬路智仁「グローバルな国際政治思想のなかの植民政策学 『間・帝国史的な思想循環』という試み」『国際関係論研究』38号(2023年)のなかに反映されている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Tomohito Baji	4. 巻 60
2. 論文標題 An Apex of the Racialization of the World	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 International Politics	6. 最初と最後の頁 720-726
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1057/s41311-023-00441-z	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Baji Tomohito	4. 巻 98
2. 論文標題 Colonial policy studies in Japan: racial visions of Nan'yo, or the early creation of a global South	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Affairs	6. 最初と最後の頁 165-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/ia/iiab207	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 馬路智仁（Tomohito Baji）	4. 巻 46(5)
2. 論文標題 The British Commonwealth as Liberal International Avatar: With the Spines of Burke	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 History of European Ideas	6. 最初と最後の頁 649-665
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/01916599.2020.1746084	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 馬路智仁	4. 巻 26(2)
2. 論文標題 20世紀初期、越境する多元主義 跨・大洋的思想史の模索	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『政治思想研究』（韓国政治思想学会編）	6. 最初と最後の頁 40-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 馬路智仁
2. 発表標題 島嶼海の主権を求めて 太平洋の自然環境と歴史叙述
3. 学会等名 2022年度政治思想学会・研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tomohito Baji
2. 発表標題 International Relations and Race
3. 学会等名 第1回小和田恒記念講座 (Owada Chair) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tomohito Baji
2. 発表標題 Ecological Internationalism? Postcolonial and Archipelagic Visions of the Pacific
3. 学会等名 International Conference 'Antiliberal Internationalism in the 20th Century: Beyond Left and Right?' Amsterdam University (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Tomohito Baji
2. 発表標題 Epele Hau 'ofa: Pacific indigeneity, historiography and environmental conservation
3. 学会等名 2022-23 ANU/UTokyo Strategic Partnership Conference 'A Pacific Intellectual History: Modern Imperialism, Indigeneity and Ecological Justice' (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 馬路智仁
2. 発表標題 南洋と植民政政策学 太平洋島嶼、人種（主義）、初期国際関係論
3. 学会等名 2021年度日本政治学会・研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 馬路智仁
2. 発表標題 イギリスにおける初期国際関係論と帝国 国際政治学者アルフレッド・ジマーンの知的軌跡
3. 学会等名 第203回国際関係論研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 馬路智仁（分担執筆）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 429
3. 書名 「政治思想史、帝国、グローバル化」國分功一郎／清水光明編『地球的思考 グローバル・スタディー ズの課題』	

1. 著者名 馬路智仁（Tomohito Baji）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 245
3. 書名 The International Thought of Alfred Zimmern: Classicism, Zionism and the Shadow of Commonwealth	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------